雪煙舞う燕岳体験

斉藤整紀

- **平成29年11月24日(金)～26日(日)**
- **メンバー　西明彦**(CL)・正子、白井、斉藤整
- **コース**

24日・25日　竹橋23：00（バス）⇒5：30有明温泉7：05→中房温泉登山口7：15→合戦小屋11：15→13：00燕山荘（泊）

25日　燕山荘6：30→燕岳山頂7：05～10→燕山荘 7：40→合戦小屋 8：40→11：20中房温泉（昼食・反省会）12：45（バス）⇒19：10新宿

11月25日（土）　曇り

竹橋を夜11時に出たバスは、明け方の6時半、有明温泉で４～５人の客を降ろした後、動かなくなった。アイスバーンの坂道で動けなくなった様だ。タイヤにチェーンを装着しようとしている様で、運転手が運転席で少し動かしては、外と、何度も往復している。何の説明もなく1時間以上が過ぎた。ここから終点の中房温泉まで徒歩10分のこと、作業途中で状況説明をして、「急いでいる方は歩いては」とか勧めてもいいのではないのか。

あまりのロスに呆れた我々4人と女性1人は、6時50分バスを降り、歩くことにした。しかしバスの近くで身支度をしていると7時ごろ突然バスは出発した。我々に「乗りませんか？」の一声もなく！冬山の時間ロスの恐ろしさへの無頓着と顧客サービスを忘れた運転手と車掌に猛省を促したい。

さて、今年最後のバス便と小屋営業に合わせた燕岳の冬山の触りを求めて、私も西さんの企画に乗せて頂いた。しかし、今年の燕は、例年になく大雪で、厳冬期の装備がいるとのネット情報に、希望と不安が相まった気持ちが過った。しかし目白の精鋭が一緒の心強さがあり、安心して臨むことができた。

中房温泉まで歩いて体が温まり、登山口で準備する多くの登山者を尻目にスタート。登り口からうっすら雪があり、まもなく急登の上り坂は本格的な雪道になる。しかし良く踏まれていて、夏道と変わらないペースで上る。第一ベンチでアイゼンを着け、富士見ベンチまでは、ベンチ毎に小休止を入れて風の少ない樹林帯を進む。

合戦小屋が近づく頃から、疎らになった樹林帯を吹き抜ける風は、強まり寒さも加わる。合戦小屋は、有難いことに、ストーブを点け、売店もやっており、多くが一息入れている。

合戦小屋を後に、枝が歩行を邪魔する一帯を過ぎると、森林限界越えた見通しの良い尾根に一本の冬道が上へと延びる。烈風、雪煙が吹き荒ぶ。しかし赤旗はこまめに置かれ、風雪に曝されてもトレースははっきりしており、ワカン無しでアイゼンだけで十分である。しかし冬道は距離が短い分、急登で、体の牽引に苦労をする箇所もある。風雪で見通しが悪く厳しい条件下、黙々と歩を進めると、先頭の明彦さんから「燕山荘が見えたヨ！」の嬉しい声。その小屋までの最後の上りは吹き溜まりで足場が悪く体が上がらない。それでも何とか小屋に辿り着いて一安心。しかし冬の入口へは風下の夏道側は雪庇が張り出して危険なため、風上の西回りを余儀なくされる。最後に恐怖の西面２００ｍが待っている！

肌を露出すると凍傷を負う者もいるという。ネックウオーマーを上げて、フードを下げて、姿勢を低くして進む。西風が痛い！洟が顔に掛る。皆、夢中で身を守る。ついに小屋の玄関前に到着、助かった！午後１時過ぎ着で混んでいるハズだが、小屋の入口付近は、係員が丁寧かつ適切な客あしらいで、混雑を感じない。やはり好感度の高い小屋である。濡れた物は少なかったが、少し乾燥室に入れて、他はベッド周辺でも余裕があった。

お酒を楽しんだり、小屋前からの写真撮影を楽しんだりしていると、続々宿泊者が！200 人超えか！食事の後は、ホルンの音を枕辺で聞いてゆっくり休んだ。

11 月 26 日（日）　晴のち曇り

好天の朝、5 時 45 分からの朝食を済ませ、燕岳へ向かう。夜明け前でサングラス無しが良いとの正子さんのアドバイス。容赦のない強風・西風が顔面左を襲う。花崗岩の砂礫交りで痛い。槍ヶ岳方面に目をやっても涙で眺めることも叶わない。ヤッケのフードに左手を添えていると、手が凍えて痛くなる。右に大きな岩に隠れる場所があり、丁度、夜明けと重なり、しばし写真タイムを楽しむ。山頂に近づくに連れ砂礫が多くなる。7 時過ぎに遂に燕岳山頂へ。槍・穂高、後立山連峰など 360 度の展望ながら、強風で目を開けているのが辛く、写真撮影も儘ならない。急いで下山。イルカ岩など楽しんでいる余裕もなく小屋へ戻る。

帰りは西風を右から受ける。しかし今日は、空は明るく見通しも展望もよい。一気に小屋の西角に至り、あとは雪煙の舞うフカフカ雪の下りを楽しみながら下山。帰りのバスに余裕があり、ゆっくり下りた。中房温泉に 11 時に着き、風呂に入らず、反省会はビールで乾杯！

私は、予想外の厳冬期登山が経験出来ラッキー！しかし慣れない装備の脱着や身支度ののろさで皆に迷惑を掛けてしまった。それでも正子さん始め、3 人に助けられ、無事に冬山を楽しむことができたことに感謝する。（了）